

新島襄の言葉

森 一郎（女子中学校・高等学校教諭）

アメリカに留学中の下村に送った書簡にみられる言葉である。

新島が脱国を決心した理由の一つは外国の技術知識を身に付ける事が一つの目的であった。アーモスト大学を卒業したときの資格はマスター・オブ・サイエンス（理学士）であり、新島の自然科学に対する造詣は深かった。

一八六九（明治二年六月一日）付父民治宛書簡には「扱當時は実ニ国家一振の時ニして是非とも男児の研窮し聖道を修め、且窮理精密（舎密か）機械等の学を盛にし、我日本をして欧羅巴各国に齊く振わしめんの時にぞんし候間」と日本の将来に科学技術の必要を感じている。

新島は、同志社が政府の高等中学に一步も譲らない為には自然科学の教育が必要であることを感じ、ジョンズ・ホプキンス大学大学院に留学中の下村に自然科学の分野を任すことを依頼した。新島の要請に応え下村は理化学学校設立のため学業半ばにして帰国し、一八九〇（明治二十三年九月）に開校したハリス理化学学校の初代教頭に就任した。残念ながら一八九七（明治三十）年に理化学学校は廃校になつてゐる。しかし、この理化学学校で教育を受けた中瀬古六郎、加藤与五郎、鈴木達治、三宅驥一等が中心となつて一九四四（昭和十九）年に工学部の前身である同志社工業専門学校として再興された。

小生ハ我カ校ニ於テサイヨンスノ振ハサルヲ
痛嘆シ候間、貴兄ニシテ充分御用意アリ其ノ
方ヲ負担シ賜ハ、必ラス我カ校ノ面目ヲ一変
スルニ至ラン

「小生ハ我カ校ニ於テサイヨンスノ振ハサルヲ
痛嘆シ候間、貴兄ニシテ充分御用意アリ其ノ
方ヲ負担シ賜ハ、必ラス我カ校ノ面目ヲ一変
スルニ至ラン」

一八八八（明治二十一年）年八月一日

下村孝太郎宛書簡